

# 論文

## ルーティン化による家庭学習習慣の形成

—Google for education を用いた家庭学習の支援を通して—

澤 和真

(静岡大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻)

### Formation of Home Study Habits Using Routinization:

Through support for home study using Google for education

Sawa Kazuma

#### Abstract

The purpose of this study was to develop home study habits among junior high school students. To this end, we set a time for them to do their assignments and took steps to visualize the status of their classmates' work on the assignments. And we also analyzed how studying at home has changed for students. Assignments were provided once a week through google classroom to review content from English classes and submissions were done using a google form. Since we found that the time set aside for learners to work on their assignments was important in doing their assignments, we had them review the set time and we let the learners set their own study time based on their own schedule during the course of the study. After these steps were taken, students' progress on assignments had improved. It was revealed that the middle and lower academic stratum was particularly effective in setting appropriate study time and also the top academic stratum tackled assignment in their own time, regardless of the set time. However, we discovered that when learners' lifestyles changed from the initial time they set aside, they tended to become less engaged in the task.

キーワード： 家庭学習 習慣形成 一人一台端末 Google for education 自己決定理論 中学校英語

#### 1、問題の所在と研究の目的

##### 1-1 家庭学習の必要性と実態

中学校での新しい学習指導要領が 2021 年度に全面実施となった。文部科学省（以下、文科省）が本改訂の基本的な考え方として提示したものの一つに「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成」としており、学習者である生徒は、知識を得るだけでなく、その知識を使う能力を育てる意識が重要となる。このことにより、学校での授業だけでは知識を構築するのが難しくなっており、家庭学習のさらなる充実が重要となってきた。

学習時間の量にだけ限れば、奥貫（2021）は、英語学習の例を挙げて、家庭学習の必要性を以下のように論じている。

基本的に第二言語の習得には、2000～5000 時間が必要で（Fukuda & Yoshida 2012）日本人が英語を習得するのに必要な時間は 2200 時間（廣森 2015）であると言われており、文科省が定めた外国語（英語）授業の標準時間数は小学校から中学校までで約 508 時間であることを考えると、授業以外でも学習時間を確保することが不可欠である。

さらに、奥貫（2021）は、これまでの英語教育における先行研究を引用し家庭学習の意義として、学校の

徹底した支援によって生徒が家庭学習を確実に実践するようになったとき、学習時間の確保、知識の獲得、自律的能力の向上が学習者にもたらされると述べている。つまり、家庭学習を充実させ、習慣化することにより、知識が得られるだけでなく、学習者の資質が高まることについても期待ができる。先行きの見通しの立たない現代社会を生き抜く子供たちにとって、家庭学習を自律的に進め、充実させることは、これからの人生を充実させることにもつながると考える。

令和 3 年度全国学力・学習状況調査の質問紙の回答によると、「学校の授業時間以外に、1 日 1 時間以上勉強をする（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」生徒の割合が平日 75.8%、休日 77.6%と比較的高いものであったが、「家で自分で計画を立てて勉強していますか」の問いに対し、「よくしている」と回答した生徒が 19.4%であったことから、学校以外では（塾や家庭教師も含む）学習を行っているものの、計画的に行うことができない生徒が多いことが見てとれる。

##### 1-2 一人一台端末を使った家庭学習

近年では、家庭学習を円滑に進めるために、一人一台用教育端末（以下、一人一台端末）を使った教育実践も広く行われている。

稲垣ら(2018)は、小学校3~6年生に一人一台端末を貸与し、適応学習型の教材「やるKey」を用いて、学校および家庭で行わせ、取り組み状況と学力の相関関係をまとめている。

この研究によると、学校で標準的な問題に取り組み、家庭で個に応じたレベルの問題に取り組みることが取り組み状況を持続させたり、正答率をあげたりするなどの成果を生み出している。

また、学習教材やソフトウェアなどクラウドを通して、一括提供されることや、場所や時間を選ばず学習者が課題に取り組むことも容易になることも述べている。(稲垣ら 2018)。

さらに教職員が児童生徒の学習の取り組み状況を管理しやすいことから、今後も教育現場でのニーズが高まるものと思われる(文科省 2020)。

2020年の新型コロナウイルスの蔓延によりGIGAスクール構想(文科省 2019)の実現が加速され、小中学生に対する一人一台端末の整備がほぼ完了した。さらに、コロナウイルス対策として休校措置が行われたことから、一人一台端末を使った在宅での学習形態が急速に広がった(文科省 2020)。しかし、これは緊急避難的な側面が強く、常態的に一人一台端末の持ち帰りを行っている小中学校は25.3%(文科省 2021)と、家庭での活用についてはまだ不十分である。

### 1-3 研究の目的

学習者における家庭学習の充実、学習者自身の知識の広がりや、資質の高まりが期待されるが、多くの中学生が計画的に家庭学習を行うことができていない点は先述の通りである。

理想的な学習者の姿として、学校での学び定着させるべく、自律した学習習慣が身につけていることであると考えるが、本研究では、その第一段階として、一週間に一度程度の課題を家庭学習としてコンスタントに取り組み続ける姿を目指すことを目的とする。

そのために、指導者である立場の人間(教師)が学習者の家庭学習を支援するための枠組みを構築し、家庭学習の習慣化を図るための方法を検証していく。

さらに、一人一台端末を家庭学習のハードとして活用すれば、クラウド上でのやり取りが可能になり、学習者、指導者の両面における効果的かつ合理的に作用することが期待される。そこで、本研究で構築する家庭学習の枠組みの中には、一人一台端末を使った要素も取り入れ、この効果についても検証していきたい。

### 1-4 本研究での家庭学習の分類

本研究では、家庭学習を「宿題」、「準宿題」、「自主学习」と三つに分類した。教師や学習塾の指導者などの第三者により、強制された家庭学習を「宿題」とする。第三者から、学習の提案がなされるが、

これを行うことは学習者の判断に委ねられている家庭学習を「準宿題」とする。第三者による干渉がなく、学習者自らの意思により行われる家庭学習を「自主学习」とする。また、塾での学びや家庭教師による自宅での学習は家庭学習にあたらない。

本研究で行う家庭学習の課題は準宿題とした。本研究が最終的に目指しているのは、生徒が自律的に家庭学習を行うことである。課題を宿題として設定すると、自律性を発揮する余地がほとんどなく、研究の目的にそぐわない。他方、自主学习を課題とすると、内容だけではなくその質と量が個人によって大きく異なり、明確な結論を導きにくくなる。さらに、一定数存在すると想定される自主学习で何をすればよいかわからない生徒は、自主学习を課題とすれば習慣化以前の段階で脱落してしまう。このような理由から、課題として準宿題を選択した。

### 1-5 研究の方向性

本研究では、学習者である中学生が家庭学習の自律した習慣を身につけるために、クラウド上で課された準宿題を習慣的に行うための枠組みについての検証を行った。

本研究におけるルーティンとは、毎週コンスタントに提示された、家庭で行うべき課題(準宿題)を、学習者が行うことと定義する。

準宿題の性質上、学習者は提示された課題を行わなくても良い。例として、学習者は課題が提示された初回は行うが、次の週に提示された課題には行わないという選択ができる。

家庭学習の枠組みを通すことで、与えられた課題を行うという選択をし、課題に取り組み続けることがルーティン化され、自律的に家庭学習する習慣が形成されれば、学校での学びをベースとした幅広い知識の定着が期待される。

さらに課題をこなす中で学習者の知識が定着し、学ぶことにより興味が芽生え、自信がつくことで、自主学习のレベルに発展させることができれば望ましいと考える。

これまで、家庭学習に関する様々な実践研究が報告されており、特に他律から自律に向けた家庭学習の枠組みの検証についての実践が広く行われている。

森ら(2018)は、小中学生を対象に、徳島県教育委員会と鳴門教育大との連携事業「徳島『確かな学力』育成プロジェクト」のもとでの家庭学習に注力した実践を行い、「家庭学習の友」を使うことで、家庭学習の取り組み状況を改善させている

この研究によれば、質問紙により、児童生徒の家庭での生活習慣が他律であることを明らかにした上で、学習者の自律に向けた「家庭学習の友」を作成し、これを軸に学校と家庭の共通指導事項として家庭

学習を支援してきた結果、小学校低学年、中学年、高学年、中学生のすべての学年において「学習時間の確保」という点で成果を収めるだけでなく、家庭学習時間の増加を生み出したことを明らかにしている。

なお、「家庭学習の友」には、学習者の行動記録や学習時間をはじめ、目標を記載し、それに対する振り返りをまとめる項目などがあり、これらを記し「家庭学習の友」を学びの拠り所とした介入には一定の効果があるのは明らかであるが、家庭学習内容へのアプローチという点には課題を残している。

山森ら(2014)は、中学2年生に注目し、当学齢期は動機づけの要因により家庭学習の時間が短くなる傾向があり、家庭学習の取り組み状況が下降すると述べている。

つまり、動機づけの要因から学習意欲を高めれば、家庭学習の取り組みも好転するのではないかと考え、モチベーションを理論化した自己決定理論

(Self-Determination Theory; Deci & Ryan 1985)の3つの欲求(three psychological needs; Deci & Ryan 1985)を参考にした家庭学習の枠組みを通すことで、継続的な学習習慣が身につくのではないかと考えた。

3つの欲求は自律性、有能性、関係性に分類され、それぞれの定義解釈を以下にまとめる。

- ・自律性：自分の行動は自分自身が決めていると実感したい。
- ・有能性：自分には能力があると感じたい。
- ・関係性：他者と精神的な関係を築きたい。

廣森(2015)は、それぞれの欲求を取り入れた学習を心掛けることは英語学習における動機づけを高める、あるいは維持する上で有効な手段になると考えられると述べている。

自己決定理論をもとにした教育研究は学習動機尺度として引用した研究例はあるが、中学生の家庭学習に焦点をあてた研究はこれまで行われてきていない。

本研究では、これら二つの研究をもとに、家庭学習の枠組みを構築し、この枠組みを通して課題を提示することで、習慣的に課題に取り組むようになると考えた。

また、今後の家庭学習の可能性を考えると、Google classroomのようなクラウド上の仮想教室において課題を提示することも増えてくると予想できる。

自宅に居ながらも、課題に取り組まれるだけでなく、コメント機能を使うことで級友の取り組み状況が可視化されることもクラウド教室を活用することの強みであると考え。

学習者の残したコメントが、他の学習者の目に触れることで、同一空間にいないにも関わらず、学習者同士が繋がりを感じ、このことが学習者同士を互いに意識させ、家庭学習の取り組み状況を好転させるのでは

ないかと考えた。

しかし、先にも述べたように、小中学校における一人一台端末の整備は全国的にはほぼ完了しているが、常態的に家庭に持ち帰り、学習ツールとして活用することに関しては現状慎重である。

実情、一人一台端末を使った授業研究は、反転授業をはじめ、全国的にも多くの教育実践を行っているが、家庭学習に特化した先行研究例は少なく発展途上の分野である。

本研究では、一人一台端末を家庭学習ツールとして活用する可能性も探っていくつつ、クラウドを通した課題の提示を行う中で、級友同士の取り組み状況の可視化することも家庭学習の枠組みの中の要素として含み、学習者の家庭学習習慣が形成される様子に迫っていきたい。

## 1-6 家庭学習の枠組み

本研究で学習者に提示した家庭学習の枠組みは、先にも述べた、家庭学習の友と自己決定理論、3つの欲求を参考に形成した。

- ・学習者に課題を行う時間を自ら設定させる。
- ・課題を提出した際には、classroomのストリームに課題を終えた旨を書き込ませる。(このことで級友間の課題の取り組み状況を可視化させる)
- ・学習課題は復習に限定し、動画やgoogleフォームでの問いは、基礎基本的な内容をベースとする。(これは、課題を既習事項にすることで、学習者が一人でも取り組みやすい内容にし、自分の力でできたことを実感させるためである。)

これら家庭学習の枠組みを通すことで、準宿題の課題であっても、多くの学習者が習慣的に家庭学習に取り組む姿をねらった。

## 2、研究の方法

### 2-1 研究の対象と期間

本研究は、A市立B中学校の中学校2年生117名(4学級)を対象とし、中学校2年期の10月から12月まで(以下、A期・8週間)、翌年度の中学校3年期の5月から7月まで(以下、B期・8週間)の2期に渡って行った。

また検証時期は、A期もB期も検証2週目に定期テストが行われたが、学校行事や連休などによって取り組み状況に最も影響されにくい期間を選出した。

また、今回の研究では、A市教育委員会、B中学校の協力のもと、一人一台端末(Chromebook)を全生徒に貸与した。このことにより、全生徒が家庭でクラウド上にある課題を受け取ることができ、課題に取り組むための環境を整えた。

## 2-2 課題の提示方法

学習者に対して、課題の提示は以下の手順で行った。

- Google for education の classroom 内に 10 分以内の復習動画をアップロードし、学習者はそれを視聴する。

- 動画の視聴後に、学習者は Google Forms を通し、動画に関する基本的な問題（5 問程度）に答え、提出をする。

復習動画は、学習者の授業を担当する授業者の指導方法をもとに研究者によって作成されたものである。なお、研究者と授業者は別人物であり、研究者は通常の授業において、指導的な介入や助言などは一切に行っていない。

このような形で、クラウドを通じた学習環境を学習者に提供したが、準宿題という性質上、学習者にはこれらの課題の強制を行わず、あくまで「授業の復習」である旨、周知された。

また、A 期に関しては、実験群（58 名）と対照群（59 名）に分けて検証を行い、実験群には、課題を行う際には、以下の 2 つを行うよう伝えられた。

- ① 課題を行うための時間（曜日・時間）をあらかじめ設定し、その時間で行うこと
- ② 課題を提出した際には、classroom のストリームに課題を終えた旨を書き込むこと

①については、検証開始前にガイダンスを行い、その中で、課題の配信がしばらくの間続くことを説明した。この上で続けて課題を行えそうな時間を選出させ、翌日までに Google Forms を決めた設定時間をまとめ、提出をするよう指示をした。

対照群はこれらを行わずに、与えられた課題を自由な時間に行わせた。

## 3、A 期の取り組み状況から見た成果と課題

### 3-1 A 期前半・第 1 週～第 4 週（以下、A1 期）

図 1 は、A1 期の課題取り組み状況と設定時間成功率の推移である。これを見ると、第 1 週は、実験群、対照群とも提出率が 80% 程度で、両群ともに差は見られなかった。しかし、両群共に第 2 週、第 3 週と回数を

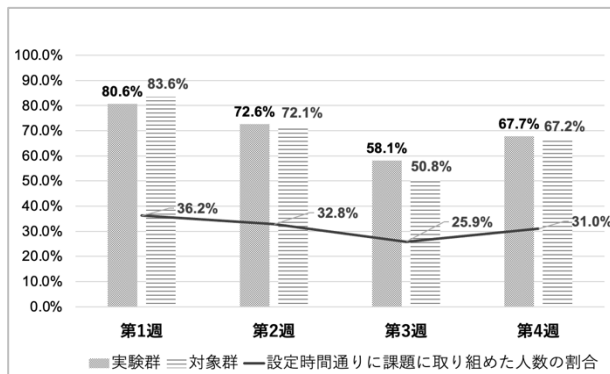


図 1 A1 期課題取り組み状況、設定時間成功率

重ねるごとに、課題の取り組み状況は下降していき、特に第 3 週では、課題に取り組んだ生徒が 60% 以下まで落ち込んだ。第 4 週は、両群共に課題に取り組む生徒が若干上昇した。

ここまでの問題点は、「①設定した時間通りに行く」生徒が、第 1 週の 36.2% をピークとし、第 4 回の時点でも 31.0% の生徒しか取り組めていないという点である。この原因が、生徒が設定した時間と生徒の日常の実態が合っていないのではないかと考えた。

これを改善すべく、第 5 週の課題配信前に「課題に取り組む設定時間の見直し」をしても良いことを実験群の生徒に呼びかけ、23 人（全体比 46.9%）の生徒が設定時間を変更した。

また、課題に取り組んだほぼ全ての生徒は「②ストリームにコメントを残す」ことは行っていた。

### 3-2 A 期後半・第 5 週～第 8 週（以下、A2 期）

図 2 は、A2 期の課題取り組み状況と設定時間成功率の推移である。課題に取り組む設定時間の変更をしても良いことを呼びかけた後の第 5 週に注目すると、実験群の生徒の課題の取り組み状況の割合が 85.5% と大幅に上昇し（前週比 17.8% 増）、この時点では、最も多くの生徒が配信された課題に取り組む、「①設定した時間通りに行く」生徒の割合も、48.3% まで上昇した（前週比 17.3% 増）。

対照群の生徒の取り組み状況は前週とほとんど変わらなかった（前週比 3.3% 増）。その後も実験群の生徒の課題取り組み状況の割合は高い水準で安定したが、対照群の生徒の課題取り組み状況の割合は回数を重ねるごとに下降傾向にあった。

A2 期に入り、実験群の課題の取り組み状況が好転した要因として、「課題を行う設定時間の見直し」が効果的に作用したことが考えられる。

### 3-3 学力階層ごとに見る、A 期の取り組み状況

A 期の課題の取り組みを学力階層ごとで分析した。令和 2 年度静岡県学力・学習状況調査の英語の点数をもとに判定し、正答率 8 割以上の生徒を学力上位層、

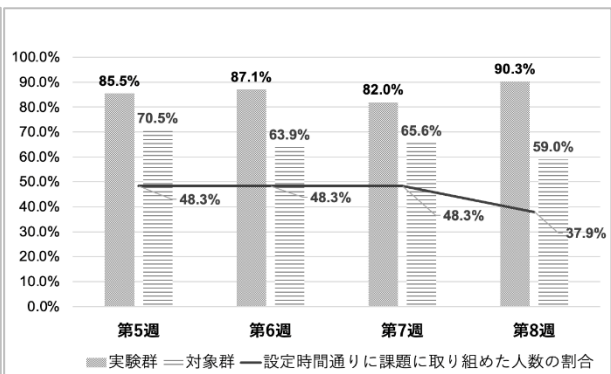


図 2 A2 期課題取り組み状況、設定時間成功率

(8.6%) 正答率4割以下の生徒を学力下位層(37.9%)、その間を学力中位層とし、さらに学力中位層を二分し、上位層寄りの階層を学力中上位層(24.1%)、下位層寄りの階層を学力中下位層(29.3%)と定めた。

**表1 A期学力階層別課題取り組み状況の推移**

学力階層(人数)	A1期平均値	A2期平均値	±
学力上位層(5)	85.0% (65.0%)	90.0% (60.0%)	+5.0% (-5.0%)
学力中上位層(14)	76.7% (35.0%)	91.7% (48.3%)	+15.0% (+13.3%)
学力中下位層(17)	75.0% (20.6%)	97.1% (32.4%)	+22.1% (+11.8%)
学力下位層(22)	67.0% (28.4%)	85.2% (48.9%)	+18.2% (+20.5%)

( ) … 設定時間通りに課題に取り組むことができた割合

表1は、A期学力階層別課題取り組み状況の推移である。これを見ると、A1期からA2期にかけての全ての学力階層が課題に取り組む生徒の割合が上昇したが、特に大きく数値が上昇したのが、学力中下位層と学力下位層、学力中上位層であった。

学力上位層は、課題の取り組み状況を高い水準で安定させることができるが、設定時間通りに課題を行う点においては、他の学力層と同じく難しいように見えた。

しかし、他の学力階層に比べて、取り組み状況が良好な点を見ると、学力上位層の生徒は自ら学習時間を見つけ出し、課題に取り組む傾向にあることと考えられる。

学力中上位層・学力中下位層は上位層と比べると、課題に取り組むときとそうでないときのムラがあり、安定して課題に取り組むことは難しいことが見えてきた。しかし、適切な学習時間を設定することで、取り組み状況は一変し、この層の9割近くの生徒が課題に継続して取り組むようになった。

そして、学力下位層の生徒は、全ての学力階層の中で、回数を重ねるごとに課題に取り組まなくなる人数が最も多かったが、学力中上位層や学力中下位層と同じように、適切な学習時間を設定することで、課題に取り組む人数が増えていった。

### 3-4 classroom ストリームにコメントを書くことの効果

A期の検証期間、実験群には、課題を終えた後にclassroomにコメントを残すよう指示されていた。

この事に関して、A期終了直後に以下の質問紙調査を行い、学習者の意識を測り、表2はその集計結果である。本調査は複数回答を可能としている。提出後にコメントを残した際の生徒の情意面を調査したもののだが、「他の人が提出しているなら、自分も提出しないといけないと思った(27.5%)」「誰が提出している

のか気になったことがあった(27.5%)」「他の人よりもはやく提出したいと思った(7.8%)」「学級の友達が頑張っているなら、自分も頑張らなくてはいけなかった(43.1%)」とコメントを残すことが、級友に自分の取り組み状況を伝えるだけでなく、提出する生徒にとっても級友を意識することとなり、提出をしなければならぬ行動に移ることが見て取れた。

classroomの特性上、クラウド上では、級友だけでなく担当教師や担任教師も取り組み状況を見ることができる。「先生も提出状況が見ることができるため、提出を忘れてはいけないと思った(21.6%)」にあるように教師がクラウド上で取り組み状況の管理をしているという存在も少なからず意識する生徒は一定の割合でいるようである。

反面、「意識したことがない(35.3%)」と答えた生徒も多くおり、この内訳を見ると、学力上位層6.2%・学力中上位層56.2%、学力中下位層25.0%・学力下位層12.5%となっており、学力中上位層の半数以上は級友のコメントを意識することなく課題に取り組んでいたが、それ以外の学力層は少なからず級友のコメント意識していたことになる。

級友の取り組み状況をクラウド上で可視化することは、一定の生徒にとって、課題の取り組み状況に影響を与えており、特に学力上位層、学力中下位層、学力下位層の生徒は強く影響されることが明らかにされた。

**表2 classroom ストリームにコメントを書くことに関する意識調査**

項目	%
他の人が提出しているなら、自分も提出しないといけないと思った。	27.5%
誰が提出しているのか気になったことがあった。	27.5%
他の人よりもはやく提出したいと思った。	7.8%
学級の友達が頑張っているなら、自分も頑張らなくてはいけないと思った。	43.1%
先生も提出状況が見ることができるため、提出を忘れてはいけないと思った。	21.6%
意識したことがない	35.3%

### 3-5 A期全体から見た結果と考察

準宿題の性質をもつ課題をクラウドを通し8週間にわたり提供してきたが、全8回分の課題に取り組んだのが全体の33.3%であり、実験群は38.7%、対照群は27.8%だった。

実験群の生徒に対し、「課題を行う設定時間の見直し」を呼びかけた後のA2期を見ると、A1期には一度も設定した時間に課題を行わなかった生徒が54.8%いたが、この中の52.9%の生徒が、A2期に入り、毎回の課題を設定した時間に行うようになった。

このことから、準宿題の課題を行わせることにおいて「① 課題を行うための時間(曜日・時間)をあらかじめ設定し、その時間で行うこと」「② 課題を提出した際には、classroomのストリームに課題を終え

た旨を書き込むこと」には一定の効果があるが、継続性には疑問が残るということが明らかになった。

これを改善すべく、「設定時間を見直し」を行い、学習者にとって適切な学習時間を見極めさせ、その時間に行うよう働きかけることが、課題の取り組み状況の改善につながり、家庭において継続的に課題を行う環境を作り出すことが明らかにされた。

しかし、全8回分の課題を設定時間通りに行った生徒は3.2%であり、7回分の課題を設定時間通りに行った生徒は6.4%と「準宿題の性質をもった課題を設定時間通りに継続して行うこと」には、課題を残した。

さらに、A1期・A2期に分けると、A1期にて、全ての課題を設定時間通りに行った生徒は4.8%だったが、A2期に入り、全ての課題を設定時間通りに行った生徒は17.7%に上昇した。

このことから、課題を行う学習時間を設定し、何回か行わせた後に、課題を行う設定時間の見直しを行い、学習者にとって適切な学習時間を再設定させることが、時間通りに継続して家庭学習を行うことにつながる事が推察される。

以上の結果より、学習者にとって「適切な学習時間を見極めさせる」ことが、習慣的に家庭学習に取り組む糸口になると考え、B期ではこのことに注目し、継続調査を行った。

#### 4、B期の取り組み状況から見た成果と課題

##### 4-1 B期前半・第1週～第4週（以下、B1期）

A2期に入り、実験群の課題の取り組み状況が上昇した経緯を考えても、A1期が終えた直後に「課題を行う設定時間の見直し」をすることが、学習者にとって習慣的に課題を行うための有効な手立てであったことが示された。

そのため、B期の検証がはじまる前の2週間分の行動記録を取らせ、生徒に自分の行動パターンを認識させた上で、学習時間を設定させた。

今期も8週間の前半（B1期）、後半（B2期）に分けて検証を行い、A期と同様、家庭学習の枠組みに則り、課題を提示した。また、B期は、研究対象が中学3年生であり、学習成績が受験に直結することが考えられるため、研究倫理の観点から実験群、対照群の設定をせず、検証前後の比較で、効果の検証を測った。

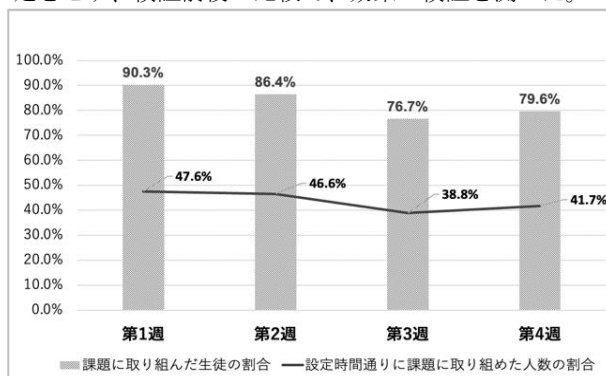


図3 B1期課題取り組み状況、設定時間成功率

図3は、B1期の課題取り組み状況と設定時間成功率の推移である。これを見ると検証がスタートした、第1週の課題取り組み状況が90.3%と、A期を含めた最高値を記録した。しかし、これをピークに課題の取り組み状況が伸びることがなかった（第2週86.4%、第3週76.7%、第4週79.6%）。

しかし、設定時間通りに課題に取り組む生徒の割合がA期に比べ上昇したことが特徴的であった。A期は5週目・6週目・7週目に記録した48.3%の生徒が設定時間通りにできたことが最高値であったが、B1期はこの数値を全て上回る結果となった（第1週52.7%、第2週53.9%、第3週50.6%、第4週52.4%）。このことから、学習者自身が自らのスケジュールを把握した上で学習時間を設定すれば、その時間通りに課題に取り組めるようになることが明らかにされた。

B1期は4回全ての課題に取り組んだ生徒は67.9%だったが、4回全て設定時間通りに行えた生徒は7.7%と、学習者自らが設定した時間通りに課題を行い続けることの難しさを露呈した結果であった。第4週の課題と同時に、学習者にgoogleフォームを通し、B1期の課題の取り組み状況を内省させ、どうすれば、設定した時間通りに課題に取り組むことができるのかの手立てを自ら考えさせ、これを実行するよう指示をした。

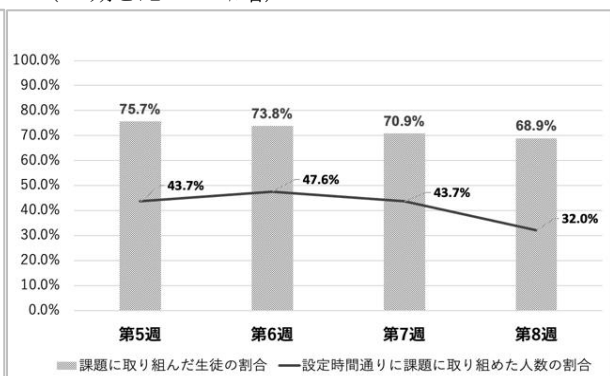
##### 4-2 B期後半・第5週～第8週（以下、B2期）

図4は、B2期の課題取り組み状況と設定時間成功率の推移である。

B1期終了後に行われた手立ての介入直後の第5週では、課題に取り組む生徒の数は増えず、その後も取り組み状況は改善されることはなかった。（第5週75.7%、第6週75.8%、第7週70.9%、第8週68.9%）。

設定した時間に課題に取り組む生徒は、第5週に43.7%（前週比3.9%増）と上昇し、第6週も47.6%と上昇傾向を見せたが、これをピークに数値が下がっていった（第7週43.7%、第8週32.0%）。

B2期に全ての課題に取り組んだ生徒は54.3%とB1期と比べ減少した（B1期と比べ13.6%減）が、全て設定時間通りに行えた生徒は13.5%とわずかに上昇した。（B1期と比べ5.8%増）



**図4 B2期課題取り組み状況、設定時間成功率**  
4-3 学力階層ごとで見ると、B期の取り組み状況

B期の課題の取り組みを学力階層ごとで分析した。A期と同様、R3年度静岡県学力・学習状況調査の点数をもとに判定し、正答率8割以上の生徒を学力上位層(8.6%)、正答率4割以下の生徒を学力下位層(58.6%)、その間を学力中位層とし、さらに学力中位層を二分し上位層寄りの階層を学力中上位層(16.3%)、下位層寄りの階層を学力中下位層(16.3%)と定めた。

**表3 B期学力階層別課題取り組み状況の推移**

学力階層(人数)	B1期平均値	B2期平均値	±
学力上位層(9)	97.2% (41.7%)	94.4% (50.0%)	-2.8% (+8.3%)
学力中上位層(17)	92.6% (52.9%)	79.4% (41.2%)	-13.2% (-11.8%)
学力中下位層(17)	89.7% (50.0%)	82.4% (58.8%)	-7.3% (+8.8%)
学力下位層(61)	74.6% (38.5%)	62.7% (34.8%)	-11.9% (-3.7%)

( ) … 設定時間通りに課題に取り組むことができた割合

表3は、B期学力階層別課題取り組み状況の推移である。B期全体を見ると、学力階層が高い生徒ほど課題に取り組み、低い生徒ほど取り組まないということが特徴として見えてきた。この傾向はA期では見られず、A期では、高い割合で課題に取り組む様子が見られた学力下位層の生徒も、B期では回数を重ねるごとに課題に取り組まなくなってしまう傾向にある。

また、B2期に入り、学力上位層の生徒のほとんど、学力中下位層も8割程度の生徒は課題に取り組み続けたが、学力下位層は取り組み状況が改善されることなかった。また、学力中上位層に関しては、第6週で提出状況が下がったが、その後8割程度まで取り組み状況が回復している。

A期と同様、学力上位層は、他のどの学力層よりも高い水準で課題に取り組むことができるが、設定時間通りに課題を行う点においては、他の学力層と同じく難しいように見えた。

B1期終了後の手立て介入直後は、設定時間通りにできるようになったが、安定はしなかった。しかし、課

題に取り組む点を見れば、決まった時間に課題を行わなくても、1週間の中で時間を見つけて、課題に取り組む時間を確保する力はあることは明らかである。

学力中上位以下の層は、B2期に入っても課題の取り組み状況が改善されなかったが、この層の中の毎回課題に取り組んでいる生徒は、設定時間に課題を行えるようになっている。特に、学力中下位層の生徒は、B2期に入り、設定時間に合わせて課題を行う人数が最も増加した。

学力中上位層以下の生徒は、適切な時間を設定し、内省や手立てを入れれば効果的に作用するということである。言い方を変えれば、自分一人では家庭学習を進めることは難しいが、家庭学習の習慣化を促すために、教師や第三者的な立場の人間が定期的に取り組みに対し、声かけをしたり、手立てを入れたりすることが有効であり、家庭学習の取り組み状況が改善されていくことが期待できる。

**4-4 日常生活のイレギュラー化による習慣の崩壊**

B期の調査では、課題を提出させる際に、設定時間通りに課題を行えなかった生徒のみ、Google Formsを通して、「なぜ設定時間に課題を提出できなかったのか」その理由を選択式の質問紙で回答させ、提出させた。

表4は、これらの理由を実数で集計した結果と、B1期とB2期における平均人数の推移を表している。

これを見ると、B1期、最も多かった理由が、「課題を行う時間を忘れていた」という回答であった。

毎週の該当者数は異なるが、設定時間に課題を行うことを忘れていた生徒が、B1期では平均18.5名いたのが、B2期に入り、平均8.3名と大幅に減少している。このことの要因については、B1期終了直後に行った介入事項(取り組みの内省と自ら考えた手立てを実行したこと)が影響していると推察される。

設定した学習時間を忘れる生徒が減っていったこととは別に、B2期になると、家庭の都合や部活動により設定時間に課題を行うことができなかったと回答す

	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週	第7週	第8週	B1期平均	B2期平均	推移
家庭の用事	1	4	6	3	5	5	5	7	3.5	5.5	2.0
部活動	3	4	6	3	4	6	5	10	4.0	6.3	2.3
自分の用事(通院や塾)	5	5	3	2	3	2	3	3	3.8	2.8	-1.0
他の勉強	3	8	0	5	3	3	0	7	4.0	3.3	-0.8
趣味	0	0	0	0	0	1	1	3	0.0	1.3	1.3
忘れていた	20	17	23	14	10	8	5	10	18.5	8.3	-10.3
体調不良	0	3	3	1	5	4	2	1	1.8	3.0	1.3
機器のトラブル	11	2	2	3	1	0	3	1	4.5	1.3	-3.3
その他	4	1	1	3	2	1	0	1	2.3	1.0	-1.3
設定時間通りに課題を行えなかった生徒の人数	47	44	44	34	33	30	24	43	42.3	32.5	-9.8



る生徒が微増した。

背景に、調査時期4週目より、部活動の夏季大会が始まったことにより、部活動の活動時間が延長されたり、外部のクラブ活動が活発化したりする影響によるものだと考えられる。つまり、部活動やクラブ活動といった外的な要因より、学習時間を設定した当初の生活リズム（日常生活）と異なってしまうことで、適切だと思われた学習時間が適切でなくなってしまうことが課題を行えなくなった原因であると考えられる。

これに関しては、学習者の生活を管理する教師や家族の都合によるところが大きい。

学習者が適切な学習時間を設定していることが前提ではあるが、日常生活のイレギュラー化による習慣の崩壊を起こさないためにも、学習者は、先の予定を見通した上で、学習時間を設定することや、生活リズムが変化した際には、設定時間を改めるなどの策を講じる必要がある。

さらに、学習者の周りにいる人々（教員や家族など）が、学習者に過度に負荷をかけるような予定を設定しないことが重要である。特に家庭学習を習慣化させる上で、家族が学習者の学習時間を把握し、サポートすることが家庭学習の習慣化に向けて大きく影響を及ぼすものと思われる。

## 5、おわりに

本研究では、家庭学習の自律した習慣を身につけるために、学習者である中学生がクラウド上で課された準宿題を習慣的に行うための枠組み、手立てについての検証を行った。

学習者に家庭学習を与える上で、これを行う学習時間を設定させ、学習者同士の取り組み状況の可視化をすることで、多くの生徒が継続的に家庭学習に取り組むようになった。

しかし、与えられた課題をコンスタントに行えなかった生徒も本研究では少なからず存在した。この要因を考察すると、一つに設定した学習時間が学習者の生活にとって適切な時間設定ではなかったことが考えられる。

また、学習時間を設定した当初は課題を行うことができる時間だとしても、時期が変われば、定期テスト前や部活動の繁忙期と重なり、生活リズムも変わってくる。このことにより、当初の設定時間通りに課題を行えないということも十分に考えられる。

このことから、学習設定時間を決めて家庭学習をする際は、学習者がこれから起こる出来事を見通した上で、学習時間を設定することや、定期的に設定時間の見直しを図ることが、家庭学習の習慣化において重要であると考えられる。

さらに、学力階層別に見ると、学力上位層の生徒は、手立てがあろうがなかろうと与えられた課題には

取り組む傾向が見えた。

学力中上位層と学力中下位層は、本検証で使用した家庭学習の枠組みが最も有効に働いたことを考えると、これら生徒は自ら家庭学習を進めることに関して未熟であり、この点を補うためにも、教師のような第三者的立場の人間が、定期的に学習者の家庭学習状況を把握し、指導することが重要であると思われる。

学力下位層の生徒は、課題に取り組む生徒とそうでない生徒が二極化し、課題に取り組まない生徒に対しては、家庭学習の枠組みを通しての課題提示以前の、直接的な指導が必要であると考えられる。

A2期、B1期、B2期前にはそれぞれ取り組み状況や設定時間通りに課題を行わせるための改善を行ったが、いずれも手立て介入後は、課題が改善される傾向にある。つまり、教師が都度、課題に対する問題点を見取り、これに対する適切な手立てを講じれば、学習者の習慣化の手助けになる。

多くの中学生にとって、自主学習的かつ自律的に家庭学習を進めることが望ましいが、多くの生徒がこのような理想的な家庭学習の習慣を身につけることは簡単なことではない。本研究で検証した、学習時間を設定させ、級友同士の取り組み状況を可視化する家庭学習の枠組みは、さまざまな教科で汎用可能なものである。今後は、より学習者にとって家庭学習をすることが習慣化していくよう実践と検証を重ねていきたい。

## 引用・参考文献

- 文部科学省 (2019). 『幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント』
- 国立教育政策研究所 (2021) 『令和3年度 全国学力学習状況調査報告書』
- 廣森友人 (2015) 『英語学習のメカニズム：第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』, 大修館書店, pp. 32-33, pp. 85-105
- 奥貫明子 (2021) 『中学生の家庭学習：自己調整的なアプローチによる指導の検討』, 国際日本学研究論集, 第13号, pp27-49
- 文部科学省 (2020) 『GIGA スクール構想による一人一台端末環境の実現について』
- 稲垣忠、大森裕二、志野奈美子、阿波弘真、村上壮、菊地尚樹 (2018) 『学校および家庭における適応学習の実践と評価』 日本教育工学会論文誌, 第42号, pp. 345-354
- 文部科学省 (2020) 『ICTの積極的な活用による「学びの保障」について (令和2年6月9日 初等中等教育局 情報教育・外国語教育課長 高谷浩樹)』
- 文部科学省 (2021) 『端末の利活用状況等の実態調査 (令和3年7月末時点)』
- 森篤之、長江徹子、阪根健二、北島孝昭、藤田美智子



- (2018) 『「家庭学習の友」を活用した家庭学習支援について』鳴門教育大学学校教育研究紀要, 第 32 卷, pp. 123-136
- 山森光陽、岡田いずみ、萩原康仁 (2014) 『学級規模が中学生の家庭学習の取り組み状況およびその変化に与える影響』, 日本教育工学会論文誌, 第 38 号, pp. 113-121,
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.